

201224028A

厚生労働科学研究費補助金  
障害者対策総合研究事業

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいた  
レジリエンス向上に関する研究

課題番号 H24-身体・知的-一般-007

平成 24 年度 総括・分担研究報告書

平成 25 年 (2013) 年 3 月

研究代表者 稲垣真澄

厚生労働科学研究費補助金  
障害者対策総合研究事業

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいた  
レジリエンス向上に関する研究

課題番号 H24-身体・知的-一般-007

平成 24 年度 総括・分担研究報告書

平成 25 年（2013）年 3 月

研究代表者 稲垣真澄

## 目 次

### I. 総括研究報告

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 稲垣真澄（研究代表者）	-----1
--	--------

### II. 分担研究報告

1. 発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素に関する質的検討 稲垣真澄	-----7
2. 民間クリニックでの診療が保護者レジリエンス向上に果たす役割に関する予備的研究 平谷美智夫	-----19
3. 注意欠陥多動性障害(ADHD)児と家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究 山下裕史朗	-----29
4. 親に対する集団精神療法を通じた養育態度の変化に関する予備的研究 渡部京太	-----37

III. 研究成果の刊行に関する一覧表	-----51
---------------------	---------

IV. 研究成果の刊行物・別刷	-----53
-----------------	---------

## I. 総括研究報告

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究

稲垣真澄

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

総括研究報告書

発達障害児を持つ家族の支援ニーズに基づいたレジリエンス向上に関する研究

研究代表者 稲垣真澄

独) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部 部長

研究要旨

乳幼児期から成人期の発達障害児者を支援するためには、子ども及び子どもに関わる環境を含めたアセスメントが必要である。本研究は、様々なタイプの発達障害の保護者の支援ニーズを元に、保護者のレジリエンスすなわち「困難な状況においても克服できる力」を評価し、子どもの行動、レジリエンス、養育行動の関係を明らかにすること、さらに、母親のレジリエンスを向上させる要因を検討することを目的として行った。初年度には①発達障害医療に従事している医師やコメディカルへの面接調査、②小児科クリニックにおける保護者レジリエンス向上のための要因分析、③注意欠陥／多動性障害（ADHD）児の母親レジリエンス向上要因分析、④広汎性発達障害（PDD）児を持つ保護者への集団精神療法の効果について、解析した。その結果、母親の不適応の状態が、医療機関に受診・通院し、支援者によって障害の認識が促されることにより、対処技能、価値観の変化、社会的支援の面で成長し、適応していくことが質的研究で推察された。また、児や保護者のニーズに則った医療・保健・福祉サービスが重要であることが示唆され、ADHD児の保護者が子どもに対して前向きな養育態度を促進させている要因として「家族からの支援」、「親役割から離れる時間」、「ADHDについての知識や対応の仕方に関する情報」が指摘された。PDD児の母親には「親の会」が親自身のレジリエンスを高め、子どもとの関係修復にも役立っていると示唆された。二年度に向けて、発達障害児の母親を対象にした面接調査や質問紙調査を大規模サンプルについて実施していくこととしたい。

研究分担者

平谷美智夫 平谷こども発達クリニック  
院長  
山下裕史朗 久留米大学医学部小児科  
准教授  
渡部京太  
国立国際医療研究センター国府台病院児童  
精神科 医長

A. 研究目的

発達障害児者支援のためには、児を取り巻く環境を含めた介入を考えるべきである。例えば、注意・欠如多動性障害（ADHD）に対しては、薬物療法のみではなく、環境調整やペアレントトレーニングなどの家族に働きかけることが治療効果の向上につな

がることが重要であり、養育者自身も環境要因からの影響を受けて変化・成長していくものと考えられる。

そこで、本研究では発達障害児とその母親を環境も含めて評価する総合アセスメントツールを提案し、好ましい環境因子を構築したいと考えて初年度の研究をスタートした。

発達障害児の母親機能や環境要因を評価する指標はほとんど報告されていない。そこで本研究では、家族環境要因を評価する指標と支援ニーズを提案することからはじめることを考える。発達障害児のサインから養育者は子育てに困難さを感じる人が多い。その困難さを養育者はストレスと感じ、不適切な養育行動に至ることもある。したがって、支援者は困難性を克服する能力（レジリエンス）を保護者、とくに母親において向上させるように介入していくことが重要と考える。

今年度は、医療機関に所属する支援者すなわち医師やコメディカルを対象としたインタビュー調査を進めた。彼らは多くの発達障害児の母親に関わっており、当事者よりも発達障害児の母親が変化する過程を客観的に答えることができると考えたからである。

また民間小児科クリニックにおける診療のうちどのような要因が母親レジリエンス向上につながっているかを後方視的に調査し、小児科クリニックの現状を調査した。

そして、注意欠陥多動性障害（ADHD）児を持つ母親の障害受容、養育態度に関する調査を通じて、ADHD 児と家族のレジリエンス向上の鍵を握る因子について検討した。

児童期からかんしゃく、興奮、ひきこもりといった情緒的問題や攻撃的問題行動を呈し診療を開始してから青年期まで達した広汎性発達障害（PDD）の子ども、およびその親への集団精神療法を通しての取り組みを通じて、レジリエンス向上を検討した。

## B. 研究方法

### 1. 医師およびコメディカル面接調査

医療機関で発達障害児臨床に従事する支援者 10 名（医師 8 名と心理士 2 名）に面接調査を行った。2012 年 5 月～11 月の期間で、半構造化面接を行った。対象の経験年数などの基本属性について質問した後に、発達障害児臨床において、母親が変化した事例、苦労した事例や良好であった事例の共通点について聴き取りを行った。面接中の音声は、IC レコーダーによって記録した。面接実施後、音声データに基づき逐語記録を作成した。記録は、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（MGTA）によって解析された。なお面接前に、本研究の目的について説明を行い、IC レコーダーで音声を記録することの同意を得た。また、本研究の内容は、倫理委員会で審査を受けて、承認された。

### 2. 発達障害児・者に必要な医療のサービス

小児科クリニックでの実践内容についてまとめて、発達障害児・者に必要な医療のサービスにはどのようなものがあるか、検討を行った。

### 3. ADHD の子どもを持つ親の障害受容と支援に関する研究

平成 23 年 9 月下旬から 11 月上旬にかけ

て、久留米大学病院小児科に通院する ADHD の子どもを持つ親 49 名に質問紙調査（障害受容についての質問、周囲からのサポートについての質問）を行った。

#### 4. 保護者への集団精神療法による養育行動変化

青年期に達した PDD の子ども、およびその親への集団精神療法の取り組みを振り返り、不適応状態の PDD の子どもの対応に悩む親の養育態度の変化を検討した。

### C. 結果

#### 1. 医師およびコメディカル面接調査

MGTA により、母親の《不適応》の状態が、医療機関に「受診・通院」し、支援者によって障害の《認識》が促されることにより、《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》の面で成長し、適応していくことが推察された。

#### 2. 発達障害児・者に必要な医療のサービス

児の発達相談、医療・療育に加えて、発達障害に関連する合併症・併存する疾病や日常の健康管理についての医療や福祉制度利用のための診断書交付などのサービスをおこなっている実態が明らかとなった。また、心理学・言語学・学習障害などの専門家による児童の特別指導と並行した若いスタッフに向けたスーパーバイズが定期的に行われていることが指摘された。

成人期自閉症指導の専門家による成人期自閉症の保護者指導なども定期的実施され、青年期～成人期のカナー型自閉症の保護者や本人へのサービスが確保され、医療・療育活動により、療育や中核症状以外

の中枢神経疾患や健康管理を含めた発達障害児・者の生涯に渡る医療ニーズのかなりの部分をカバーすることができていることがあげられた。

#### 3. ADHD の子どもを持つ親の障害受容と支援に関する研究

質問紙調査にて ADHD を持つ子どもの親 49 名のうち、48 名のデータを解析したところ、子どもの障害を積極的に受け入れ、新しい価値観を得るなどプラスの気持ちをもっている親が 70%を占めたが、自責の念を持っている親も半数いた。

子どもの障害をポジティブに受け入れている親群(n=22)は、ネガティブに受け入れている群(n=18)やポジティブ・ネガティブ半々のグループ(n=8)と比べて、家族から支援を最も受けており、親役割から離れる時間を最も持っていた。ネガティブに受け入れている群では、ADHD についての知識や対応の仕方に関する情報が他の群よりも少ないが、逆に「同じ ADHD の子どもを持つ親に関する情報」を得ていると感じている人は最も多かった。「家族以外の良き理解者がいるか」の質問に対して、全体の傾向としては、「学校の先生」および「友人」に子どもの状態を理解してもらえていると感じている人が多かった。ポジティブに受け入れている親群(84%)は、他の群(50%)と比較して「周囲のサポートを受けて自分にプラスになった経験」が多かった。「同じ ADHD の子どもを持つ親に関する情報」を得ていると感じている人が他の支援に比べ全体的に少ないという結果に対し、自由記述の結果によると、「子ども、親同士のつながりが心の支えとなっている。」と回答している人

が多かった。

#### 4. 保護者への集団精神療法による養育行動変化

親の会は4ヶ月に1回の開催であり、頻度は多くないものの、会を重ねるにつれて、「自分の子どもの経過や最近の状況」を語ることから、「子どもへの対処の仕方」「社会福祉のサービスや就労支援」といった情報の交換、さらに「親自身の問題」へと深まっていった。また、改善に向かいつつある子どもの親がリーダーシップを発揮するようになっていった。

そのような親の発言-例えば「子どもだけではなく親自身の人生を大切にすることも必要」「ある年齢に達したら、子どもにひとり暮らしの経験をさせることは必要」-は、親の会に参加しているメンバーの共通認識となりつつあった。

#### D. 考察

医療機関に所属する支援者への面接調査を実施し、質的分析を行った結果、発達障害児の母親における適応過程として、母親の《不適応》の状態が、医療機関に受診・通院し、支援者によって障害の《認識》が促されることにより、《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》の面で成長し、適応していくことが推察された。また、レジリエンスを動的な過程の最終的な結果として捉えると、《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》が、発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素であることが示唆された。

研究分担者の所属する小児科クリニックにおける発達障害児への医療保健福祉サー

ビスの実態が明らかとなり、発達障害児およびその家族のニーズに的確に応えるエビデンスベースの診療と療育を実践することが児と母親にとっては重要と思われる。今後は、保護者レジリエンス向上を意識した診療が必要で、そのことにより個々の療育内容がより充実すると思われる。

ADHDの子どもを持つ親の障害受容と支援に関する研究結果からは、保護者の子どもに対するプラスな気持ちを促進させている要因として「家族からの支援」、「親役割から離れる時間」、「ADHDについての知識や対応の仕方に関する情報」があった。支援ニーズとしては、「親同士がつながれる場所や機会」をもっと身近なところで作っていくことが求められているのではないかと考えられた。

親の会では、「他の患者（人）が良くなるのをみて、自分もという希望を持つ」「自分一人が悩んでいるのではない」「情報の交換」「他の患者（人）を助けて、自分が役に立っている」「人のまねをしながら自分の行動を考える」「対人関係から学ぶ」「語ることによって重荷を下ろす」といったことが、サポートになっているのではないかと考えられ、親のレジリエンスを高め、そのことは子どもとの関係修復にも役立っていると思われた。

#### E. 結論

研究初年度において、医療機関に所属する支援者を対象として面接調査を実施し、質的分析によって発達障害児の母親における適応過程を明らかにした。そして、一般成人のレジリエンスの要素と比較したところ、適応過程の最終的な経過がレジリエン



スの要素に対応していることが示唆された。

次年度以降、当事者を対象とした面接調査や大規模な質問紙調査を実施する必要があるが、発達障害児の母親のレジリエンスの概要を様々な点から明らかにしたものであると示唆される。

#### F. 健康危険情報

特記事項無し

#### G. 研究発表

1. 論文発表 なし

#### 2. 学会発表

- 1) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄: 母性意識と子どもの行動特性が母親の抑うつ傾向に及ぼす影響. 第59回日本小児保健協会学術集会, 岡山, 2012. 9. 29.

#### G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他 なし

## Ⅱ. 分担研究報告

### 1. 発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素に関する 質的検討

稲垣真澄

厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）

分担研究報告書

発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素に関する質的検討

研究分担者 稲垣真澄

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部 部長

#### 研究要旨

本研究では、医療機関に所属する医師等の支援者を対象として、面接調査を実施した。そして、【発達障害児の母親における適応過程】を分析テーマとして、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（Modified-Grounded Theory Approach）による分析を行った。その結果、母親の《不適応》の状態が、医療機関に「受診・通院」し、支援者によって障害の《認識》が促されることにより、《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》の面で成長し、適応していくことが推察された。この過程の《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》は、発達障害児の母親のレジリエンスの要素と考えることもでき、先行研究における一般成人のレジリエンスの要素と類似していた。本研究により、発達障害児の母親のレジリエンスの要素の概要は明らかにすることができたと思われ、次年度以降は、発達障害児の母親を対象にした面接調査や大規模質問紙調査を実施していくこととしたい。

#### A. 研究目的

発達障害児の行動特性は育児の困難さに関連し、養育者において、精神的健康度が低下することや養育態度が悪化することもある<sup>1,2)</sup>。また、育児の困難さの負の影響には個人差があり<sup>3)</sup>、その背景には、負の影響を軽減する母親自身の要因が想定される。したがって、このような要因の概要を明らかにすることは、発達障害児を養育している保護者、とくに母親の支援に対して有益な示唆を与えることができると予測される。

一般的に、困難な状況やストレスの負の影響を軽減する要因は、「レジリエンス」と

呼ばれている<sup>4)</sup>。そして、対象の属性によって置かれる状況は異なるので、レジリエンスの要素には多様性がある。したがって、すべての対象に共通するレジリエンスの要素を評価することは不可能であり、特定の集団におけるレジリエンスの要素を評価した方が有益である<sup>5)</sup>。しかし、これまでに、発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素を検討した研究は少なく、この点を明らかにする必要があると研究分担者は考えた。

レジリエンスには、大きく分けて2つの捉え方があるとされる。すなわち、「良好な

適応に至る動的な過程やその過程の最終的な結果として捉えるもの」<sup>6,7</sup>と「負の影響を軽減する性格特性として捉えるもの」<sup>8</sup>である。発達障害児の母親において、母親自身も成長しながら適応していく過程が想定されるため<sup>9</sup>、レジリエンスという概念は、動的な過程で捉えたほうが、発達障害児の母親に適用しやすいと考えられる。以上のことから、本研究では、動的な過程として捉える立場をとりながら、発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素を明らかにすることを目的とした。

今年度は、医療機関に所属する支援者をターゲットとした研究を進めた。彼らは多くの発達障害児の母親に関わっており、当事者よりも発達障害児の母親が変化する過程を客観的に答えることができると考えたからである。そこで、医療機関に所属する医師等の支援者を対象とした面接調査をまず実施し、解析することとした。

## B. 研究方法

### 1. 対象

医療機関で発達障害児臨床に従事する支援者 10 名に面接調査を行った。対象は医師 8 名と心理士 2 名であった（表 1）。いずれも発達障害臨床経験年数が 10 年以上あるので、発達障害児の母親の心的経過を様々な言葉で、豊富に語る事ができる対象であると考えられる。

### 2. 分析者及びスーパーバイザー

分析者は、心理学を専攻し、学位を取得した。現在は、発達障害児・者の治療や支援について研究する部門に在籍している研究員である。これまで、母親の養育行動と

子どもの行動特性の関係性について研究を行ってきた。スーパーバイザーは、小児神経科の医師 2 名及び分析者と同じ発達障害児・者の治療や支援について研究する部門に在籍している研究員 1 名によって行われた。医師は、ともに発達障害児臨床に従事している。以上のような経験や属性が、本研究の分析に大きな影響を与えている。

また、面接調査及び逐語記録の作成も、分析者及びスーパーバイザーによって行われた。

### 3. データ取得

2012 年 5 月～11 月の期間で、半構造化面接を行った。面接者（インタビュワー）の人数は、対象によって 1～4 名の間で異なった。

対象の経験年数などの基本属性について質問した後に、発達障害児臨床において、母親が変化した事例、苦勞した事例や良好であった事例の共通点について聴き取りを行った。自閉症スペクトラム障害児の母親について回想することを要請したが、知的障害、注意欠如多動性障害、学習障害、てんかんなどについての語りもみられた。

面接中の音声は、IC レコーダーによって記録した。面接実施後、音声データに基づき逐語記録を作成した。各参加者の録音時間及び文字数を表 1 に示す。また、平均録音時間は、1 時間 16 分であり、平均文字数は、30,808 であった。

### 4. 分析方法

修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（Modified-Grounded Theory Approach : M-GTA）<sup>10,11</sup>によって逐語記

録を分析した。M-GTA は、質的研究法の一つであり、木下<sup>10)</sup>によって開発された。変化する過程を説明するために適した手法である点で、本研究の目的に合致し、さらに、分析方法として明確であるため、M-GTA を選択した。

また、類似した手法としてグラウンデッドセオリーアプローチ（Grounded Theory Approach : GTA）が用いられることもある。GTA は、データを切片化した後で、分析するのに対して、M-GTA では、分析者の問題意識に基づきデータに表現されたコンテキストを分析する。本研究では、医師等の語りから、母親と児の関係性を読み取り、母親の状態を解釈する必要があった。そのため、分析には、切片化を行う GTA よりも M-GTA が適していると考えて、後者を選択した。

## 5. 分析手順

M-GTA では、主に、①分析テーマの設定、②概念の生成、③カテゴリの生成、④結果図の作成の手順で行われる。これらの手順は、実際には、同時並行で行っていくものである。本研究で行われた具体的な分析の経過については、結果に示し、ここでは、それぞれの手順の概要について説明する。

### ① 分析テーマの設定

研究テーマは、研究の意義などを含めた形で広範に設定されるので、データに即した解釈を行うために適していない場合がある。したがって、テーマを限定する必要がある。M-GTA では、この限定されたテーマを分析テーマと呼ぶ。分析テーマは、分析をする中で、データに適合するように調整

されていく。

### ② 概念生成

データの特定の部分（具体例）に着目し、分析テーマに基づき解釈することで、概念を生成する。他の概念（最初の概念の場合は、他の概念を想定する）と比較検討し、具体例が豊富であることを確認し、概念の有効性を判断する。生成した概念は、分析ワークシートに、概念名、定義、具体例、理論的メモとともに記載する（表 2）。

### ③ カテゴリ生成

カテゴリは、概念間の関連である。概念を比較検討し、抽象度を上げて、概念間の相互関連を想定することによって、カテゴリが生成される。

### ④ 結果図の作成

概念生成やカテゴリ生成の作業を通して着想された全体の流れや過程、動きを図示したものである。

## 6. 倫理的配慮

面接前に、本研究の目的について説明し、IC レコーダーで音声を記録することの同意を得た。また、本研究の内容は、国立精神・神経医療研究センター倫理委員会で審査を受けて、承認されたものである。

## C. 結果

まず、分析の経過について概説し、次に、カテゴリ内の構造を傍観しながら各概念について説明し、最後に、結果図を提示し、全体の流れについて考察する。また、分析テーマを【 】, カテゴリを《 》、概念を

「 」、概念の定義を〈 〉、具体例を“ ”内に示した。本文中の具体例は、分かりやすさのため、内容が損なわれない程度に、相づちや間を省略するなどの修正を加えた。

## 1. 分析の経過

### 1-1. ステップ 1

予備的に、5名の逐語記録から、【発達障害児の母親の状態】を表す具体例を抽出し、概念を生成した。それらの関係性を検討することで、分析テーマを、【発達障害児の母親の成長過程】に設定した。この時点では、21の概念が作成された。さらに、スーパーバイズを受ける中で、最終的に、分析テーマは、【発達障害児の母親の適応過程】となった。

### 1-2. ステップ 2

最終的な分析テーマで、5名のデータを見直しながら、概念を再度確認した。そして、概念を比較検討することにより、カテゴリを生成し、現象特性を考慮して、結果図を作成した。

### 1-3. ステップ 3

対象 1名ずつ、分析に加えながら、概念を生成し、結果図を修正していった。また、概念間、カテゴリと概念間の関係から、削除した概念もあった。最後に加えた対象において、新たな概念が生成されなかったため、理論的飽和化がなされたと考え、分析者による分析を一旦終了した。この時点における概念数は、20であった。

### 1-4. ステップ 4

このステップでは、概念の有効性、カテ

ゴリの構成、全体の流れなどについてスーパーバイザーと 2 時間程度の議論を 3 回実施した。スーパーバイザーとの議論に基づき、修正を繰り返し、最終的な結果図を作成した (図 1)。尚、最終的な概念数は、21 であった (表 3)。また、各参加者に認められた概念数は、表 1 に示されている。

以下にカテゴリを示していく。

## 2. 不適応カテゴリ

《不適応》カテゴリを構成する概念は、発達障害児の母親の負の状態を表すものである。「子どもの悪い部分への注目」のように、子どもの悪い部分に注目してしまうことがあると考えられる。障害の告知後に、支援者の適切な支援を受けられなかった場合には、母親は、障害という言葉に動揺してしまっている「混乱・落ち込み」の状態や子どもが発達障害であることを認めようとしなない「否認」の状態になることもあると考えられた。さらに、「理想像への固執」や「障害完治願望に基づく対応」のように、母親が本来もつ理想や願望が、子どもにとって悪い影響を与えていることもあると推察される。“就職を巡るところでは、通常の就職へ、お母さんが夢を持ってしまって”から推察されるように、一度、子どもの年齢が低い時期に、適応していても、子どもが青年期を迎えた際に、母親が《不適応》の状態になることもあると考えられる。したがって、母親が《不適応》になる時期は、子どもの発達時期に関連せず、本研究で示した結果図も単純な時間経過を表すものではない。

## 3. 認識カテゴリ

障害やその困難さは、様々な経緯で、母親が《認識》すると想定される。(子どもの行動を目の当りにすることで、障害を認識する)こともあるが、母親の状態によっては、支援者の介入によって《認識》が促されると想定される。“子どもがわざとする行動で、イライラさせられていたというのがあって、それが、この子の手だし、症状の一部なんだよ”のように、支援者が子どもの背景にある特性を丁寧に説明し、母親の「行動の背景の理解」が深まることで《認識》されることもあると考えられる。さらに、母親が子どもの障害を認識することを避けている場合には、まず、子どもに介入して、子どもの状態が改善する様子を母親に見せることで、《認識》を促すことも想定された。

医療機関に所属している支援者を対象にしたので、「受診・通院」自体に、《認識》の意味が含まれていた。さらに、「受診・通院」が、「行動の背景の理解」、「成功からの認識」、「障害の認識」を促す要因となっていることが推察された。

#### 4. 社会的支援カテゴリ

《社会的支援》には、他の母親、学校・園、医療機関、福祉、家族などの資源を活用することが含まれた。これらの支援者・機関とつながりができ、利用する中で、支援者・機関の専門性や特性について母親が理解することによって、適切に「支援者・機関の選択」ができるようになると考えられる。

#### 5. 対処技能の獲得カテゴリ

障害を《認識》することで、母親には、

〈障害に関する情報を得たい気持ち〉が芽生えてくると考えられる。障害に関する情報を集める中で、実際の行動について、どのように対処すればよいかについても学習していき、「対処方法の獲得」ができると推察された。

#### 6. 価値観の変化カテゴリ

子どもの症状が改善し始めると、精神・時間的に「余裕」が出てくると考えられる。そして、子育てがうまくいかないことで失っていた自信が回復し始めることが想定される。余裕ができ、自信が回復し始めると、客観的に、〈子どもの良いところを理解する〉ことができるようになり、子どもの悪い部分を含めて、「特性の受容」ができるようになっていくことが推察された。

#### 7. 全体の流れ

この過程では、発達障害児の母親が、《不適応》の状態から開始される。そして、医療機関における支援者が介入することで、子どもの障害やその困難さについて《認識》し始める。さらに、そのことによって、《対処技能》、《社会的支援》、《価値観の変化》の側面を成長させ、適応していくことが考えられる。また、結果図では、《対処技能》、《社会的支援》、《価値観の変化》のカテゴリが独立して図示されているが、実際には、これらのカテゴリが、相互に関係し促しながら、適応していくものであると想定される。

#### D. 考察

本研究では、医療機関に所属する支援者を対象として、面接調査を実施し、質的

析を行った。発達障害児の母親における適応過程として、母親の《不適応》の状態が、医療機関に受診・通院し、支援者によって障害の《認識》が促されることにより、《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》の面で成長し、適応していくことが推察された。また、レジリエンスを動的な過程の最終的な結果として捉えると、《対処技能》、《価値観の変化》、《社会的支援》が、発達障害児の母親におけるレジリエンスの要素であると示唆される。

佐藤と祐宗<sup>12)</sup>は、一般成人のレジリエンス尺度を作成するために、事前に文献レビューを実施し、レジリエンスの要素を、肯定的自己概念 (I am)、効力感 (I can)、活用資源 (I have) にまとめている。本研究で想定されたレジリエンスの要素と比較すると、効力感 (I can) は《対処技能》、活用資源 (I have) は《社会的支援》、肯定的自己概念 (I am) は《価値観の変化》に対応するものであると考えられる。活用資源と社会的支援は、内容がほぼ一致する要素であると考えられるが、《対処技能》と《価値観の変化》については、発達障害児の母親で特有な内容が含まれている。

効力感には、ストレスコーピングや感情のコントロールなど、自身の精神的な処理に関わる一方で、《対処技能》は、発達障害児の適切な養育方法を獲得する過程を表している。また、肯定的自己概念は、自分自身の捉え方に関する要素であるが、価値観の変化は、子どもの障害を受容する過程に強く関わるものである。したがって、発達障害児の母親のレジリエンスの要素には、子どもとの関係性の中で機能する要素が含まれていると考えられる。

本研究の結果を解釈する際に、M-GTA のもつ限界<sup>10)</sup>以外にも、考慮すべき点がある。本研究では、支援者の語りについて分析を行ったので、データには、支援者の主観が含まれており、支援者との関わり以外の情報が不足している。したがって、発達障害児の母親の適応過程には、今回の分析では、明らかにできなかった概念や経過が含まれている可能性がある。この点については、発達障害児の母親を対象とした面接調査を実施し、本研究で示した理論と比較検討を行い、検証されることが期待される。

## E. 結論

研究初年度において、医療機関に所属する支援者を対象として面接調査を実施し、質的分析によって発達障害児の母親における適応過程を明らかにした。そして、一般成人のレジリエンスの要素と比較したところ、適応過程の最終的な経過がレジリエンスの要素に対応していることが示唆された。

今後、当事者を対象とした面接調査や大規模な質問紙調査を実施する必要があるが、発達障害児の母親のレジリエンスの概要を明らかにしたものであると示唆される。

研究協力者 (所属)

鈴木浩太, 森山花鈴, 小林朋佳: 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所

## 参考文献

- 1) Harrison C, Sofronoff K. ADHD and parental psychological distress: role of demographics, child behavioral characteristics, and parental



- cognitions. *J Am Acad Child Adolesc Psychiatry* 2002; 41: 703-11.
- 2) Lovejoy MC, Graczyk PA, O'Hare E, Neuman G. Maternal depression and parenting behavior: a meta-analytic review. *Clin Psychol Rev* 2000; 20: 561-92.
  - 3) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄. 子どもの行動特性と母親の抑うつ傾向の関連性: 母性意識の効果について. 査読中.
  - 4) Ahern, N. R., Kiehl, E. M., Lou Sole, M., and Byers, J. A review of instruments measuring resilience. *Issues in comprehensive Pediatric nursing* 2006; 29: 103-25.
  - 5) Tusaie, K., Dyer, J. Resilience: A historical review of the construct. *Holistic nursing practice* 2004: 18: 3-10.
  - 6) Luthar, S. S., Cicchetti, D., & Becker, B. The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child development* 2003; 71: 543-62.
  - 7) 荒木剛. いじめ被害体験者の青年期後期におけるレジリエンス (resilience) に寄与する要因について. パーソナリティ研究 2005 ; 14 : 54-68.
  - 8) Jew, C. L., Green, K. E., & Kroger, J. Development and validation of a measure of resiliency. *Measurement and evaluation in counseling and development* 1999; 32: 75-89.
  - 9) 橋本真規, 橋本陽介, 熊井正之. 障害児を育てる母親のレジリエンスの実態: 半構造化面接調査による質的研究. 教育情報学研究 2011 ; 10 : 1-13.
  - 10) 木下康仁. ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッドセオリーアプローチのすべて. 弘文堂. 2007.
  - 11) 木下康仁. 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法. 富山大学看護学会誌 2007 ; 6 : 1-10.
  - 12) 佐藤琢志, 祐宗省三. レジリエンス尺度の標準化の試み--『SH 式レジリエンス検査 (パート 1)』の作成および信頼性・妥当性の検討 (看護に活用するレジリエンスの概念と研究). 看護研究 2009 ; 42 : 45-52.
- F. 研究発表
1. 論文発表 なし
  2. 学会発表
    - 1) 鈴木浩太, 北 洋輔, 加我牧子, 三砂ちづる, 竹原健二, 稲垣真澄: 母性意識と子どもの行動特性が母親の抑うつ傾向に及ぼす影響. 第 59 回日本小児保健協会学術集会, 岡山, 2012. 9. 29.
- G. 知的財産権の出願・登録状況
1. 特許取得 なし
  2. 実用新案登録 なし
  3. その他 なし

表 1 対象の属性

対象	職種	経験年数(年)	録音時間 (時間:分)	文字数(字)	概念数
A	医師	36	1:12	28,813	7
B	医師	25	1:19	31,522	10
C	医師	35	0:59	21,604	10
D	心理士	10	0:57	22,859	10
E	医師	20	0:47	17,119	7
F	医師	24	1:58	47,862	6
G	医師	25	2:22	65,288	9
H	医師	28	0:58	24,702	7
I	医師	28	1:20	27,702	6
J	心理士	11	0:48	20,612	9

分析順に記載した。概念数は、各参加者のデータの中で、最終的な 21 概念が認められた数である。

表 2 分析ワークシートの例

概念：否認
定義：障害を否定したい気持ち
① 具体例「(B)「なんでうちだけがね、行きなさいって、言われてるか,わかんない」と言うんですね。」
② 「……」
③ 「……」
……
理論的メモ
障害を疑われて,怒っている様子
自分の子供が,障害であることを否定したいという気持ち
混乱の要素から切り離す。

表3 概念リスト

概念	概念名	定義	具体例
1	子どもの悪い部分に対する注目	子どもの悪い部分に注目する	「(C) 外来に来ると、その、子ども、ね、お子さんの、困る点とか、欠点とかを、まあ、とにかく、言いつのって」 他 8例
2	否認	障害を否定したい気持ち	「(D) 「なんでうちだけがね、行きなさいって、言われてるか、わかんない」と言うんですね。」 他 6例
3	理想像への固執	母親の理想像に固執してしまうこと	「(I) たとえば子供はこうあるべしとか、理想像が高い、で、そういう、まあ、容易に、こうチェンジできないんですよ。(D p17)」 他 5例
4	障害完治願望に基づく対応	障害自体が治ると考え、対応している様子	「(C) もっと、なんか、あの、●●(病院名)に来れば、もっと、何かこの子が、突然よく分かるようになって、え、学校のお勉強でも、40点だったのが、突然90点になるんじゃないかと、・・・」 他例
5	混乱・落ち込み	子育てで混乱している、または、落ち込んでいる様子	「(C) だから、最初の頃、お子さんが小さい頃は、みんな、結構、あの、何がなんだかわからないので、悲観的、になっていらっしゃる方もいますけど。」 他 13例
6	受診・通院	子どもの異常に気づき、受診または通院する	「(B) まあ、学校で、少し困ったことが増えてきたということで、初診だったんですね。」 他 5例
7	行動の背景の理解	行動の背景を理解することにより、納得する様子	「(H) いわゆる巻き込みと呼びますが、そういう手にのっちゃってますね、あの、本当に子どもが、わざとする行動で、イライラさせられていたというのがあるんで。それが、この子の手だし、症状の一部なんだよ、ということを教えて、どんな風に対処したらよいか、というような、アドバイスしたら、どうも、お母さんがストンと入ったみたいで。」 他 5例
8	成功からの気づき	子どものうまくいく様子を見ることで、障害を認識する	「(B) それやったことが、全部、もう、ぼんぼんうまくいってですね。(中略) もうあの、2日か3日ぐらいで、学校に戻すようにね、しますからっていう風に、実際、こう、いろいろ言われたことが、うまくいって。実際行けたんですよ。そこから、ずーっと、もう、いい養育方法をずーっと伺っていたね。」 他 7例
9	障害の認識	子どもの行動を目の当たりにすることで、障害を認識する	「(A) 子どもは、一生懸命、同じ絵書いて、私に見せたりしているのを見ながら、お母さんと話しているっていうことを通じて、かなり、あの、「お母さんが分かってくれたかな?」と思ってる、」 他 5例
10	障害に関する情報の希求	障害に関する情報を得たい気持ち	「(H) 今はね、今はやっぱり、親御さんが割と、インターネットとか、そういった情報をつかむのは割とうまいですよ。そのために、あの、僕よりも知っている親御さんもおられる半面、まだ、もう、要するに、え、分からんから先生お任せ、みたいな人もおられるんで。」 他 5例
11	対処方法の獲得	実際の行動について、学習し、対処方法を身につける	「(E) あと、割と、あの PDD とか、自閉症のお子様、は、については、あの、例えば、癲癇がひどいとか、あの、そういうことに対してどう対処したらいいとかですかね。そういうことは、かなり丁寧に、一応お話をして」 他 13例

表 3 の続き

概念	概念名	定義	具体例
12	他の母親とのつながり	他の障害児の母親と友達になつたり、話したりすること	「(F)お母さんたちが、同じような年齢のお母さんね、それ、だいたい、あの、まあ、えっと、月 1 回すると、だいたい、あの、発達水準も似たお母さんにすると、だいたい一時間すると、来てくれるお母さんたち楽しいですね」 他 6 例
13	学校・園とのつながり	学校や園と相談や働きかけができる様子	「(D) 後は、「園にそういうのをやってみました。」とか、うん、「園ともこう情報交換してます。」っていう風に、こう、こちらで、や、療育の場面が、ちょっと外に、広がるというか、」 他 4 例
14	医療機関とのつながり	医療機関に相談できる人がいる	「(G) まあ、OT つかうのは、もうひとつ、やっぱり、しばしば、こっちはみれないから、週一でも、2 週間に 1 回でものね、平均来てくれて、話す相手がいたらさあ、(中略) 子どものことをネタに、話ができる人がいたら、安心やないですか。」 他 2 例
15	福祉とのつながり	福祉的なサポートを受けている様子	「(H) いわゆる、こう、お母さんと子どもだけという、そういう施設に今暮らしていたので、え、その施設の職員が、随分といろんな話相手になってくれるんですよ。」 他 1 例
16	家族の支え・理解	家族が母親をサポートする	「(C) 初診の時に、お父さまがついて来られる方、っていうのは、まあ、かなり大丈夫なんですかね。まあ、それでも、たまに、後になって、分かれちゃったりする方も、いないわけじゃないですけど、あの、お母さまが一人で奮戦していらっしゃる方、っていうのは、結構やっぱ大変で。」 他 7 例
17	支援者・機関の選択	相談内容に合わせて、母親が適切に支援者・機関を選択できている	「(D) うん、うん、頑張っているな一っていう気はします。えー、まず、支援はしなくて、園の先生によく相談するとか、よく聞くように、こう、やっぱり、人とを、うまく、巻き込めるっていうんですね。よく、あのサポートを、上手に使えるお母さんも、パワーがあるなと思うことがあります。」 他 10 例
18	余裕	時間・精神的に余裕ができた様子	「(E) あの一、ちょっと改善点があると、少しおうちの方も少しずつ余裕が出てきて」 他 2 例
19	自信の回復	自信が回復する様子	「(E) 結構、逆に、しかりつけちゃったりとかして、ますます、こう、痼癖がひどくなっちゃうみたいなのがありますよね。そういうのを割と丁寧に説明して、あの一、そうすると、それで、だいぶ落ち着いて、お母さんもちょっと自信を取り戻したり」 他 4 例
20	肯定的な理解	子どもの良いところを理解する	「(C) お子さんの、なんていうんでしょう、こう、あの、長所とか、能力を認めて、それを、こう、積極的に、あの、育て、でしかも、その結果、あの、育てきたものを、あの、こう、自分たちの中だけで、持つてくるんじゃないで、こう、一般の方にもみていただけるような場を作られて」 他 4 例
21	特性の受容	子どもの特性を受け入れている様子	「(A) こっちのお母さんのほうが、より、積極、積極的というか、能動的に、あの一、この子の限界を、しよう、承知して、この、あの、それを、あの、踏まえた生き方をしてほしいという思いを、幼いころ、割と小学生年代から、持っていたんです。」 他 6 例